

梅娘と「淪陥時期」北京文壇

張 欣

一、荒涼たる華北文壇の再建

当時の文芸刊行物と書籍は雨後のたけのこのようで、当時の文壇の作者もひっきりなしに現れてきた。ゆえに文壇は華やかに飾られ、極めてにぎやかだった。語りきれない話題が徹夜の長話のために供することができ、描き尽くせない題材が無数のペンのために用意されている。しかし、そのすべては砲火とともに去ったのである。書籍や新聞は途切れ、作者たちは流星の如く四散してしまった。文壇は直ちにもぬけの殻となり、どこもかしこも寂寞としていた⁽¹⁾。

「盧溝橋事変」前後の華北文壇を偲んで、蔣瀨は以上のように語っている。確かに盧溝橋の一発の銃声が華北文壇に空白時期をもたらしたのである。大量の知識人が北京を去り、国民党支配区または共産党支配区へと赴いた。「戦争のため、文学だけではなく、すべてのことは或る時期停頓に陥ったのである。民国二十六年の後半、北方の出版界は全体的に活気がなかった。雑誌は停刊となり、単行本はなおさら出版などされず、新聞さえ小さな半頁に縮小されたのだ。そんな時に文芸云々などと言えただろうか」⁽²⁾。

文壇の寂寞は新文学の凋落をも意味している⁽³⁾。「淪陥」の地となった華北において、新文学の作者や読者に対する不満の声が上がり始めた。

崩壊してしまった文壇はどうなるのか。一部の人がそれを再建し始めているのをわれわれは目にしたが、再建者の多くはシンマイであり、こうした仕事は本当に簡単にはいかない。その結果は当然昔には及ばず、前人の後塵を拝することさえできない。ここには進歩がなく、あるのは保守ないし落後だけだ。南方の「孤島」は然り、北方の「古都」も然り⁽⁴⁾。

今日の文筆家は出身のため、その表している社会意識には意識的であれ無意識的であれ、小市民的な気質がある⁽⁵⁾。

読者が本当にだめだ。小型新聞の読者は封建観念にあふれる旧式長編小説や、専ら芸能人の私生活を報道する「評劇」類の文章を愛読している。刊行物もそうである。よく売れているのは「評劇」を主とする刊行物である。[文化]水準が低い読者ならしかたがないが、残念ながら一部の中高の学生までそうである：放課後劇を聞きに行き、課外の読物は「評劇」の刊行物、課外の創作はといえば、俳優や劇を評するといったものばかりである⁽⁶⁾。

以上のメッセージから、当時文壇の凋落に対する不満が発せられていたことが伺える。いろいろの不満の中、文芸活動は困難を極めつつも、緩慢な回復ぶりを見せ始めた。

李景慈(1918—)⁽⁷⁾は当時の北方文壇をめぐる、「一九三九年北方文芸界論略」⁽⁸⁾、「一九四〇年的北方文芸界」⁽⁹⁾、「一年来的北方文芸界」⁽¹⁰⁾、「三十二年的北方文芸界」⁽¹¹⁾「北方文壇的今昔」⁽¹²⁾など総括的な評論文を書いている⁽¹³⁾。「一九三九年北方文芸界論略」によると、事変後北方文壇最初の二冊の長編小説は1939年8月に出版された李韻如の『三年』と10月に出版された朱炳蓀の『晦明』であり、共に自費出版だった。

こんな状況下で1939年9月張深切が主宰する華北随一といわれた純文学雑誌『中国文芸』の創刊は北京文壇ひいては華北文壇の再建に大きな役割を果たした⁽¹⁴⁾。「中国文壇の彗星」と言われた⁽¹⁵⁾『中国文芸』は内容が豊富で、編輯のテ

クニックにも芸術性が見られ⁽¹⁶⁾、「海外文壇雑話」や南方「平和地区」作家および国民党統治区の作家状況を紹介するコラムも設けられている。「中国文芸編集者の最大の責任は、紙の裏まで見透かすような優れた眼力で、無数の無名な作家たちの中から、多くの砂山から金を探し出すように、天才作家たちを発見し、彼らに北方文壇を復興する責任を共に負わせるということにある」と、編集長の張深切は自ら語っている⁽¹⁷⁾。

『中国文芸』だけではなく、新しい作家の出現を呼びかける声があちこちから響きだした。「淪陥区」文学の発展に大きな役割を果たした『華文毎日』にも次のような呼びかけが載せられている。「われわれは新しい血液——新進作家——を文壇に注射するべきだ。作者群を拡大し、新作家を受け入れ、彼らの創作に奨励や指導を加えることこそ、出版文化を質的に改善できるのである」⁽¹⁸⁾。

李景慈は「一年来的北方文芸界」の中で1942年の二つの大きな出来事を指摘している。一つは9月13日に華北作家協会が成立したこと、もう一つは「満州」と日本に華北の文芸作品が紹介されたことである⁽¹⁹⁾。

華北作家協会は木山英雄が「有名無名あわせて百人以上もの『作家』を集めたことも、権力を背景とする一綱打尽主義がうかがえる」⁽²⁰⁾と指摘しているように、全体主義的色彩が強い組織で、柳龍光はその幹事長となった。関永吉は「一年来華北文壇的総清算」の中で、華北作家協会を次のように評している。

作家協会が成立して三ヶ月足らずで、たくさんの仕事をした。満州と文芸作品を交換すること、日本華文大阪毎日に作品を推薦し「華北文芸特輯」を刊行させること、会員登録をすること、治安運動視察のため作家を派遣すること、作家月報を出版すること、協会の徽章をつくること、文芸賞を企画すること、など。これら多くの事はとても迅速に行ったと言えよう。普通の団体なら、往々にして長い時間と面倒な手続きが必要であろう。それは作家協会の一つの特徴だと言えるし、作家協会諸幹事が会務に熱心で、頑張っている結果だとも言える。しかし、そのたくさんの仕事はすべて会

員たちの希望に沿っているのか、また、外国に推薦する作品はすべての華北作家を代表できるのか、あるいは、各方面の華北作家をすべて網羅したかについては、おそらく討議する必要があるだろう⁽²¹⁾。

華北作家協会の機関誌は『華北作家月報』である。この『華北作家月報』の特色は文学創作にあるのではなく、文化の現状を批評する「時評」および各地の文化状況を報道する「通迅」にあるといわれた⁽²²⁾。華北作家協会が成立した後、1943年6月に芸文社も成立し、7月に機関誌『芸文雑誌』⁽²³⁾が創刊された。

もし華北作家協会を青年作家たちを代表する文学活動の集団とするのなら、芸文社は強いて言えば老作家の集団と言えるかもしれない。社長は周作人先生、顧問には銭稻孫、瞿克[兌]之らがおり、『芸文雑誌』の責任を負う編輯幹事は尤炳圻、陳綿、傅芸子の三人である⁽²⁴⁾。

作家達が未熟にせよ、読者達が新文学を避けて旧文学に耽るにせよ、これら文学団体の成立によって[文]壇は一応形を整えたと考えられよう。1943年頃になるとだんだんと華北文壇には活気が戻り、文芸活動もゆっくりと回復している⁽²⁵⁾。その影響を受け、日本語新聞の「東亜新報」も新しい作品の評論や紹介または翻訳を掲載するようになった。1943年の文壇を振り返り、黎建青は次のように総括している。

破壊の後には必ず建設が有り、衰微の次は復興が来るはずだ。この一年来の華北文壇からは実際の建設と復興の動きが見えるのである。其の一、一般の文筆人はみんな目的をもって働き、過去のように茫然とした態度ではなくなった。其の二、文学作品の生産は質的にも量的にも以前よりは進歩している。其の三、出版事業は徐々に発達し、作者に発表の、そして読者には閲読の機会をもたらしした⁽²⁶⁾。

李景慈も1943年の文芸界はだんだんと中心が生じ、目標が生じ、個々人の単独の活動が集団的な活動に変わり、そして文化人はそれぞれが自分の立場に立ち、遊びではなく、真面目な態度で努力していると述べ、さらに、この年の華北文

壇の「出版状況」は「沈寂」から次第に「興盛」になり、叢書ブームが静かに起こっていたことを指摘している⁽²⁷⁾。当時相当の評判を呼んでいた叢書に、新民印書館刊行の「新進作家集」があり、梅娘の小説集『魚』もその中の一冊である。新民印書館の叢書には他に「少年文庫」、「創作連叢」、「訳文連叢」などがある。華北作家協会も梅娘の『蟹』や袁犀の『森林的寂寞』を含む「華北文芸叢書」を発行した。このほか、芸文社が周作人の『菴堂雜文』を含む「芸文叢書」を出版し、『中国公論』雑誌社が「中国公論叢書」を出版している。

二、北京の梅娘

1942年初め、梅娘と柳龍光は日本から北京に帰った⁽²⁸⁾。二人は北京大学近くの東四六条に居を定め、梅娘は北京大学文學院中文科に入学した⁽²⁹⁾。梅娘の回想は以下の通りである。

1942年、太平洋戦争が勃発した後、私たち〔梅娘と柳龍光〕は華北政権の首府になった北京に戻った。夫の友人である亀谷利一の要請に応じて雑誌社をつくることを手伝いに北京に帰ったのである。日本軍側はかつて軍が管理し、聖戦を宣伝してきたその雑誌社を亀谷に渡し、中国人読者の気分を緩和できるような民間社団に変えようと希望した。文学的な雰囲気の色濃く漂わせているこの日本人青年の亀谷は、社団法人となった雑誌社から、戦争の陰翳を一掃し、普通の人情を宣揚し、中口の間にある怨恨を解かす本当の雑誌社に変身させようとしていた。柳〔龍光〕の主宰の下、雑誌社が刊行した雑誌新聞は、知識を求め、娯楽を求め、生活の趣味を探求するといった柔軟性のある目標を主旨とした。中国人庶民たちが武装して威張っている日本の巡視兵を憎しみの目付きで黙って見詰めているような雰囲気の中で読者を獲得し、経済的に自立できただけではなく、黒字にもなった。亀谷は大喜びし、日中友好に本当の貢献をしたと思った⁽³⁰⁾。

「淪陷」の地北京で、梅娘と柳龍光はともに非常な活躍ぶりを見せている。武徳報社の編集長、華北作家協会の幹事長となって政治と複雑に密着していた柳龍光に比べ、梅娘は比較的文学活動に力を注いだ。梅娘はこの時期北京や「満州」の数多くの雑誌や新聞に小説や随筆を載せた。『婦女雑誌』、『国民雑誌』、『新満州』、『新少年』、『華文大阪毎日』、『中国文学』などの雑誌にはよく梅娘の作品を見ることができる。1943年には小説集『魚』、童話集『聡明的南陔』が新民印書館より出版され、1944年には小説集の『蟹』は武徳報社より、童話集『青姑娘の夢』を新民印書館より出版された。1944年からは長編小説『小婦人』を『中国文学』と『創作連叢』に連載し始め、1945年からは長編小説『夜合花開』を『中華週報』に連載し始めたが、ともに終戦によって未完の作品となった。また新民印書館の「少年文庫」に「中国故事」の『白鳥』、『驢馬与石頭』、『風神与花精』を書いた⁽³¹⁾。

この時期梅娘はまた武徳報社が発行する『婦女雑誌』の編集に携っていた。『婦女雑誌』は女性作家の作品に重点を置いていた。以下に挙げる一連の内容から、梅娘の努力も伺えよう。

年代順に見てみると、1942年第3巻第5期に梅娘のルポルタージュ「孤女楽園仁慈堂巡礼」（筆名は孫敏子）が掲載され、第6、7、8期に梅娘のルポルタージュ「大学女生在古城・北大医学院」（筆名は孫敏子）が掲載された。また第9期に随筆の「天津一日記」（筆名は孫敏子；趙今吾，張訓昭と共作），第10期に随筆の「旅青雜記」（筆名は孫敏子；趙今吾，張訓昭と共作），第11期に随筆の「海浜細語——女性作家散文特輯之一」が掲載された。

1943年第4巻第6期に「満州女作家作品特輯」を設け、華北作家協会が斡旋し推薦した吳瑛の「潜春」、乙卡の「甲魚的故事」、氷壺の「火」、但娣の「XY城人們」など「満州」女性作家の小説を載せ、その次の第7期にはこれらの小説に対する評論——「満州女作家作品評集」を載せた。同じ第7期には梅娘の手紙「覆小姐姐」や、雷妍の手紙「尺素」など女性作家によって書かれた「女

性書簡」が載せられた。第4巻第9期はまた「華中女作家作品特輯」を設け、王萍の「踏上旅途」、張奮の「一個強烈的記憶」、蔣果儒の「秋雨里的故事」など華中女性作家の小説を載せた。第10期は「日本女性作家作品特輯」を設け、岡本かの子の「期待」、窪川稲子の「挿話」、林芙美子の「命運之旅」、中本たか子の「隨筆二篇」などの小説や隨筆を載せている。

1944年第5巻第8期には「中日女性座談会」の内容が掲載されている。第11期は「我的少女時代」という特輯を設け、作者写真付きの梅娘の「我没看見過娘的笑臉」、雷妍の「逝者如斯」、孤独練離の「我很想忘記過去」を載せた。

1945年第6巻第5、6期合刊号の「女性与文学特輯」には、譚凱の「婦女与文学漫談」、雷妍の「我的第一篇小説」、寒流の「小説人生与我」、左蒂の「我怎樣写『没有光的星』」、静子の「敵国英米女作家点描」が載せられた。

小説を書く一方、梅娘はまた文学の翻訳に力を尽くした。梅娘は丹羽文雄、石川達三、細川武子、飯塚朗らの小説を翻訳したことがある。1942年に翻訳した久米正雄の長篇小説『白蘭の歌』を『民衆報』に連載していた頃のことを梅娘は後に次のように語っている。

ちょうどこの時期、私は大いなる感動を以て、日本の名作家石川達三の長編大著『母系家族』を訳した。それは地主に蹂躪された母親、資産家に玩ばれそして捨てられた娘、および娘の娘ら女性たちが自分自身の苦難から抜け出すために行った諸々の試みだった。私の身のまわりの女たちの悲惨な生活となんと似ているのだろう。地域は異なっても私たちはまさに同じ気持ちで女性の幸せな道を探求しているのである。『母系家族』は雑誌に連載し始めてから、小説の中の主人公に理解と同情を寄せ、熱情にあふれる手紙を読者からたくさん受け取った⁽³²⁾。

1943年3月「華北文芸座談会」に参加した時には、ちょうど、丹羽文雄の『母の青春』や石川達三の『母系家族』の訳文を連載中だった。その「座談会」で、梅娘は翻訳に対する自分なりの理解を次のように語っている。

中国の言葉と文章の構成は、綿密性に欠けている。われわれの簡単且つあしらいにくい言葉と文字で、叙述が綿密にして情緒豊かな西洋文学と日本文学を説明し、叙述することは、実に難しいことである。翻訳する時、われわれの語彙がいかに足りないかは、多分ご在席のみなさまも翻訳をなさったことがあれば、ご存じのことでしょう。だから、翻訳をする時は、どうしても創作する時より倍以上の努力を払わないと無理だと思っている⁽³³⁾。

1945年の秋まで、梅娘は北京で彼女の生涯において最も輝かしい時を過ごしていたのだ。恰も「淪陥」時代の上海が張愛玲にとって一番輝かしい時代であったのと同じように。

三、「石叫ぶべし」——「新進作家」の出現

「低気圧の時代に、気候風土の適さぬ場で、文芸の花園に奇異の花の咲くことを期待し幻想する者はおるまい」⁽³⁴⁾という傅雷の話が、「淪陥区」の文学を論じる場合、よく引用される。「淪陥区」北京には「奇異の花」こそなかったが、「路傍に無造作にころがっている自然の石」⁽³⁵⁾のような新進作家たちが確かに登場したのである。

「事変」後北方文壇最初の二冊の長編小説——1939年8月に出版された李韻如の『三年』と10月に出版された朱炳蓀の『晦明』——の作者はともに女性だった。これについて李景慈は次のように評している。

不思議なのは二冊の小説の作者は共に女性であり、しかも書かれているのはすべて愛情物語である。

『三年』は李韻如女史が書いたのである。女を主人公にし、ある男子に対する恋愛の心理の変化を描写し、喜劇として成功した。『晦明』の作者朱炳蓀女史が書いたのは嫁いだ女がほかの人を愛してしまった悲劇だが、結局はまた喜劇に転じている。この二冊はすべて読みがいがあるとはいえる。

彼女たちが愛情に対する見方は凡俗を超越しているからである⁽³⁶⁾。

「不思議」どころか、「淪陥区」の言説空間を考えれば有り得る現象でもあろう。イデオロギーに迷わされがちな男性作家たちに比べ、常に主流イデオロギーの周辺に位置している女性作家たちにとっては、変化した環境に適応するため乗り越えなければならない障害は多少は小さいと言えよう。「淪陥区」の上海と同じく、北京でも女性作家が活躍していたのである。前述の『婦女雑誌』は女性作家の園地であるが、ほかの総合雑誌や文学専門誌にも女性作家の作品が掲載されていた。例えば『中国文芸』の場合、1940年12月第3巻第4期は「女作家專輯」に李未央、哲西ら八人の小説と訳文を載せ、「北京に残っている女性たちの気持ちを少し覗ける」⁽³⁷⁾とコメントを付けている。翌年2月第3巻第6期はまた「女性作家特輯」を設け、寒流、張清蔭ら十人の作品を載せた。恋愛や結婚など身の回りの日常を書くことは、「淪陥区」上海と北京との共通点である。孤独練筆の次の文章は、蘇青の随筆を彷彿させるであろう。

人それぞれ恋愛が必要だということは、人それぞれ食事が必要だということと同様である。古人曰く「飲食男女、人之大欲」。飲食は必要だけれど珍しいことではないといえようが、まして愛はいつそう食べるものがなくて餓死することとは比べ物にならないのだ。多くの人は恋愛神聖云々と叫んでいるがとんでもないことだ。試しに先ず極めて神聖不可侵の心を抱いて食事してみよ。真面目腐って、熟考してから座り、更に熟考してからお箸を挙げ、戦々恐々として深い淵を覗き込むかの如く、薄い氷の上を歩むかの如くであったら、後には必ず三日間は胃痛に苦しむことだろう⁽³⁸⁾。

いかにも現実的でしかもユーモアが見られ、この文章から「淪陥区」女性作家の風貌も垣間見ることができよう。

梅娘のほかに、「東洋哲学の造詣が極めて深く、しかも文章は落花生から影響を受けているようだ」⁽³⁹⁾といわれた雷妍がいた。落花生とは、許地山のペンネームである。李景慈は梅娘について、「彼女には熟練したペンがある。プチ・ブ

ルジョアの生活を書いた作品は、鏡のように輝いているきれいな装飾ではあるが、まだそのペンを皆のために用いていない」と言った上で、梅娘より雷妍に話題を変え、「〔雷妍の〕『良田』が出版された後、あまり注意されなかったが、今年は『白馬の騎者』を出し、普段刊行物に発表されている短篇小説も加えたら、その飛ぶように速い進歩は数多くの人を驚かすだろう。彼女が書いた人物はかなり多く、教員あり、学生あり、社会のあらゆる面影を含んでいる。それは彼女が梅娘より進歩しているところである。しかし彼女にはまだ熟練したテクニックが必要であり、彼女は精力を再び長編小説に使うべきだ」⁽⁴⁰⁾と論じている。「進歩」の概念はややプロレタリア文学のにおいをうかがわせるが、題材の範囲がより広いものであることを言っているとは言えよう。

女性作家が活躍しているだけでなく、「新進作家集」⁽⁴¹⁾などの出版は、「新進作家群」となった新人文学者たち全体の登場を物語っているのである。

1944年『中国文学』に載った「文化報道」は以下のように記録している。

「大東亜文学賞」を受賞した袁犀。その受賞作の『貝殻』は本月初め三千冊を再版。又梅娘の『魚』も同時に五千冊を再版し、定価はともに三元にあがったが、売れ行きは相変わらず盛況である。〔盧溝橋〕事変後華北出版界により出版された小説の再版はこれが始めてだった⁽⁴²⁾。

関永吉『秋初』短篇創作集は今装丁中、近日発売。当の本は「新進作家集」の第六冊目である。其の第一冊目の袁犀の『貝殻』、第二冊目の梅娘の『魚』は共に三版となり、以下例えば馬驪の『太平願』、蕭艾の『萍絮集』、林榕の『遠人集』らも近日再版という⁽⁴³⁾。

実際に梅娘の中短編小説集『魚』⁽⁴⁴⁾の第8版の奥付けには、「中華民國三十二年六月二十日印刷，中華民國三十二年六月二十五日發行，中華民國三十三年三月二十日八版」と記されている。袁犀の長編小説『貝殻』⁽⁴⁵⁾の奥付けにも「中華民國三十二年五月十五日印刷，中華民國三十二年五月二十日發行，中華民國三十二年十二月十日再版，中華民國三十三年四月三十日三版，中華民國三十四

年三月十日四版」と記されている。そこから「新進作家群」はかなり読者に受け入れられたことが伺えよう。

これらの作家は創作ばかりではなく、新しくできつつある文壇のさまざまな活動にも参加し、「満州」の古丁たちのように職業作家の出現を呼びかけ、「文壇」を造るのに努力していた。「文筆家はこの段階で確かに自分の力を尽し、大量に血と汗を流しながら開拓をしていた。今日の華北文壇はこの人たちの努力の成果である。この果実はたとえ酸っぱくて苦かったとしても、立派な果実である」⁽⁴⁶⁾と、雷妍が「華北文芸一夕談」で言ったように、新進作家たちは自分の努力を大事にし、誇りに思っていたのである。また、「日本の文学者はよくわれわれの文学は暗黒の方向に傾き、明るさが足りないと論じている。たぶん彼らはただ日本人の立場に立って、それがわれわれのこのような中国の中国文学であることを忘れて論断を下したのだろう。われわれは執拗に今日の暗黒を捉え、われわれは更にしっかりと明日の光明を求めている」⁽⁴⁷⁾と、王真夫が言ったように、新進作家たちはしっかりとした中国人作家としての自覚を持っていたのである。しかし、苦労の末に創造された「文壇」も最後は徒花となってしまったのであるが。

新進作家たちは「大東亜文学者大会」⁽⁴⁸⁾にもかかわっている。袁犀は第二回大東亜文学者大会を傍聴し、梅娘は第三回大東亜文学者大会に出席した。袁犀の長編小説『貝殻』は1943年8月に東京で開かれた第二回大東亜文学者大会で「大東亜文学賞」を受賞し、梅娘の中短篇小説集『蟹』⁽⁴⁹⁾は1944年11月に開かれた第三次大東亜文学者大会で「大東亜文学賞」を受賞した。梅娘の中短篇小説集『魚』はまた第二次大東亜文学者大会の三ヶ月後の十一月に「大東亜文学賞副賞」を受賞している⁽⁵⁰⁾。

四、「新進作家」の作品をめぐる議論

大まかに分類すると、「新進作家」の作品をめぐる議論には二種類がある。一つは芸術性や言語の角度からの議論であり、もう一つは現実や政治の角度からの議論である。

「路傍の石」という比喻をつくった飯塚朗は「石叫ぶべし」というエッセーを『燕京文学』の「文芸時評」コラムに載せ、「嘗て中国文壇は、胡適呼び、陳独秀応え、銭玄同起ち、魯迅叫んで十数年、長足の進歩を遂げつつあった。それが事変の蔭に散り散りに散った」と述べた後、「路傍の石」に寄せた「希望」および隠せない「失望」をもらした。

もう彼等は抛つて置け。北京には北京の作家がいる。嘗ては路傍の石である君等が叫ぶ時が来たのだ。文化生活出版社あたりから出される、旧作家の旧作品の新版などに押されるな。私はそんな気持ちで、中国の若い作家の作品を読んでいつたのであつたが、日本の同人雑誌の作品を読む場合以上に、退屈を感じてしまつたのである⁽⁵¹⁾。

そして、梅娘の短編小説「侏儒」については次のように評している。

[[『中国文芸』1941年10月第26期「小説専号」の] トップの「侏儒」は梅娘の作品で、この人は非常によく書くし、筆も馴れている。随つてこの号の中でも、一番気持ちよく読めた。家主の家の白痴の小僧に対する、若妻の憐憫の情を淡々と書いてあるが、最後にその子が狂犬に噬まれて死ぬあたりが、妙に芝居じみて迫力に乏しい。彼女の筆性が事実を負けた感じである。この人には、いつか、仲町貞子の『梅の花』の様な好個の短篇が出来るのではないかといふ気がふとした⁽⁵²⁾。

「侏儒」に対する一面の好評の中で、飯塚は芸術性から見て、その弱点を掴んでいるといえよう⁽⁵³⁾。

袁犀、梅娘ら新進作家に対して、周作人や錢稻孫、陳綿らは「古城文学家」と呼ばれる。志智嘉は袁犀の『貝殻』と陳綿（1901—1966）の『候光』⁽⁵⁴⁾を読んで、「陳博士の作品に対し、確かに中国語の美を感じたが、袁犀君の作品を読んで感じた中国語の美はそんなに多くはない」と述べ、新進作家の力不足を指摘した⁽⁵⁵⁾。

「新進作家」同士も互いにその未熟さを指摘している。たとえば関永吉（呉楼）は李烽の「朝露」⁽⁵⁶⁾のリアリティ不足について次のように評している。

一粒の朝露は幻みたい。それは一首の詩であり、現実の衝撃には耐えられないのである。この「朝露」の物語は、いまだに恋愛の迷夢を見ている青年に嚴重な教訓を与えるはずだ。しかし作者はまだ「愛情」と「金銭」の関係、つまり、女はなぜ恋人と苦樂を共にすることができず、年寄りの男のところへ嫁いで「妾」になるのか、その間の関係がはっきりしていないのである。その関係をはっきり表現できないと、物語全体は簡単な伝奇になり、真実の価値を失ってしまうのである⁽⁵⁷⁾。

ここでは袁犀の『貝殻』をめぐる議論を一つの典型として取り上げたい。『貝殻』は古都北京と海濱リゾートの青島を舞台とし、豊かな退職官吏を父とする美しい姉妹李玫、李瑛をヒロインに展開される青年知識階級の生活を描いた物語である。姉の二十四歳の李玫は大学同級生の子を宿し、秘密裡に大学教授の趙学文と結婚した。夫の友人である産婦人科医の郝錕仁にそれを知られて脅かされる。いっぽう作者の理想の女性として描かれた十九歳の李瑛はまわりに弱気の大学生張嘉儀やプレイボーイの詩人白澍らが群れなしているが、理想の男性には恵まれない。（『貝殻』は実際は未完の編で、続編には『塩』⁽⁵⁸⁾がある。）

この小説について、それぞれ異なる立場にたった人々が各自の意見を述べている。

同じ新進作家である李景慈は『貝殻』の物語はあまりにも単純で、人物の性格は似通っていて、類型的になってしまい、すべての人物の物語はただ男女二

人の物語のようだと指摘する一方で、『貝殻』の一般の恋愛小説との異なるところを指摘して、次のように論じている。

『貝殻』は恋愛小説ではあるが、一般の恋愛小説との異なるところは、鴛鴦蝴蝶派小説のように男女の間の愛情関係を書いてはいないので、それほど古くはないのである。しかし、ある種の描写で何かを呼びかけるわけでもない、それほど新しくもないのである。『貝殻』は一風変わった作品である。恋愛小説というより、恋愛を批判する恋愛小説と言った方がより正確である。作者はラブストーリーを借りて、自分の愛情に対する見方すなわち人生に対する観察を述べているのである⁽⁵⁹⁾。

新進作家であり、郷土文学の提唱者でもある関永吉（上官箏）は『貝殻』について、「われわれにはあまり関係のない外国、スイス、またはベルギー」の本を読んでいるような気がする感想を語り、小説中の人物を次のように分析している。

作者は当然李瑛を用いてもう一人の李玫とは方向が違う女性の性格を表そうとしているが、成功はしていない。彼の作品には堅実さが足りないのだ。『貝殻』の中の李瑛にはまだ自立できる力がなく、彼女の素質はその姉と同じである。少しばかり思想上の差異があるのは、年齢や経歴が違うからであるに過ぎない。（中略）

『貝殻』には一つの大きな欠点があり、それは深刻さの欠如である。これは哲学的な本でもなければ、暴露本でもない。というのは、この二点について作者が至らなかつたからである。作者は人間の心の深みを発掘しておらず、さらに知識階級が墮落し、彼らの暮らしぶりが恥知らずになっていく原因も解釈できていない⁽⁶⁰⁾。

「深刻さの欠如」は確かに急所をついていると言えよう。それゆえに登場人物は先天的「貧血症」にかかり、性格も単一的で、はっきりした個性を持たず、悉く類型的になってしまったのである。

この「深刻さの欠如」に答えるかのように、袁犀は『貝殻』の「前記」で次のように述べている。

この小説で、私は知識人青年男女の生活を書いた。彼らがいかに生活に耽溺しているかを書いており、彼らの思想における混乱と迷い、変わり易さと矛盾を書いている。受けた教養によって生じる彼らの苦痛、彼らの知識によって作られた罪悪、そして、人間性における醜悪の一面はいかに人類の教育程度および近代生活に覆い隠されたまま膨張しているのか [を書いている]。

当然これは私の企図にすぎず、思った通りに実行するのはかなり難しいだろうと思った。なぜなら、書こうとしたのは元々「道徳小説」ではなかった。故に書き続けたら忽ち多くの問題に遭遇したのである。これは確かに難しい⁽⁶¹⁾。

肝心なのは「近代」、「知識」、「教養」はいかに「醜悪」、「罪悪」、「苦痛」に繋がっているのかという袁犀にとって手に余る問題である。この問題について、エドワード・ガンは西洋思想の中国における役割に興味を持ち、『貝殻』では西洋思想が歪曲されたと指摘し、次のように論じている。

『貝殻』は流行で無責任な自由主義的個人主義とロマンチックな愛に露骨な風刺を主に錯乱した白濁を通して与えたのである。この小説は肉体と精神の病気と同様、不倫な性または性的な企図に溢れている。登場人物の生活は道徳的に、知的に汚染されたことを現すために作られたのであり、そして小説はそれ自体にイデオロギーの戦争に貢献するという言い訳を与えるため、十分な知的な汚染を描写している。だがそれは言い訳以上のものではない。人物たちはすべて弱くて、混乱しており、ある意味では墮落しており、そしてみんなが西洋思想に少し影響されている。しかし、この小説は1935年に時代を設定されており、主な悪役の白濁は「こんなに多くの人が今年愛国者になったのは、どうにも不思議でならない」と皮肉っ

たのである。故に、この小説には親日的な成分が存在していないばかりではなく、中国人が日本人に抵抗するにはあまりに無力すぎるという考え方に繋がるため、西洋思想がいかに歪曲されたか、という角度から作品を解釈できる証拠さえ存在しているのである。この小説は中国人の間で西洋思想が演じた役割を討議するという地平でこそ成立するが、実のところこの地平自体がぐらついているのである。このテーマは重大であるが、[作者のそれに対する] 扱いははっきりしていない⁽⁶²⁾。

「淪陥区」の「文壇」では、『貝殻』を含め新進作家の作品における現実性についても議論があった。志智嘉は天津の『庸報』に連載した「關於最近之文芸作品」(「最近の文学作品について」)の中で、梅娘の『魚』や袁犀の『貝殻』など新進作家の作品への不満を漏らしている。その最大の不満は「現実性が足りない」というものであった。後に志智嘉は『芸文雑誌』で「文芸雑談」を発表し、「いわゆる現実というのは、現在の社会、即ち大東亜戦争下の社会を指すことだ」と述べている⁽⁶³⁾。

飯塚朗も袁犀ら新進作家の作品を読んで、「これだけ並べた小説の中で、どれ一つ時代の現実に触れたものはなかった。或いは書きにくくもあらう。然し何等かの息吹きへも感ずるものはない。それがどんなに寂しく思はれたことだらう。君等を、残された石くれと思ひたくないのだ」と、「現実」性の足りなさを指摘している⁽⁶⁴⁾。

このような志智や飯塚の意見に対して、新進作家の一人である李景慈は「誠摯的關懷——答志智嘉先生」(「あたたかき配慮——志智嘉氏に答えて」)という評論を書いて、反駁を加えていた。

われわれがふだん触れている現実というのは、時に多少スローガン化し、或いは八股文化する傾向があるが、これは文学者にとって捨て去るべきものだ。それゆえ、現実を正視するということは、政治の後につくことではなく、更に深く認識することである。(中略)もし、われわれの作家に南西

太平洋の戦争を考えさせたり、共産党の平和地区での暴行を描写させたりしたいのならば、たとえ、それが真の現実であっても、作家が自ら見たものではないので、むしろ彼らには自分の身の回りのささいなことを書かせる方がいいのである。(中略)ルポルタージュ類のものになると、かえって文学としての意味を失うことにも成りかねない。これも、私が志智氏とは異なる立場に立っているからであるからであろうか⁽⁶⁵⁾。

「現実」に対する認識のずれはここに現れ、李景慈は「淪陥区」においてぎりぎりの反駁を加えたのである。

五、梅娘周辺の文人たち

1、「淪陥区」の袁犀

「満州」から北京に来た袁犀はアパートの隣に住んでいた共産党員に説得され、(外国小説からの影響もあるが)、秘密革命家への憧れを抱いてコミンテルンの組織に参加し、鉄道、工場、倉庫、空港などのダイナマイト爆破に参加したことがあるという⁽⁶⁶⁾。

生計を立てるため、1941年袁犀は柳龍光(「武徳報」社編集長)の紹介で、「武徳報」社編集部の整理課員として勤めるようになり、同時に小説を書くことも続けていた。太平洋戦争勃発後の1942年1月、袁犀は抗日地下活動のため憲兵隊に逮捕され、半年間投獄された。苛酷な拷問と嚴重な取り調べを受けた後、7月に柳龍光を保証人にして釈放されている⁽⁶⁷⁾。仕事は整理課から同じ「武徳報」社内の『時事画報』編集部にかえられ、この年9月に成立した「華北作家協会」にも参加させられた。その後、袁犀は肺病を理由に「武徳報」社を休んだ。

1943年から袁犀は佐藤源三が編集課長を勤める新民印書館で、李景慈といっしょに文学叢刊「新進作家集」を編集するようになった。袁犀は昼間は編集の

仕事をし（「新進作家集」を十冊編集した）、夜は『貝殻』を書いていた。『貝殻』は「新進作家集」の第一冊として出版され、読者の好評を博し半年で再版され、合わせて四回版を重ねた。袁犀は新作を続々と発表し、書くことに自分の存在意義を見い出していた。

私は当時一番勤勉に書いた一人であり、しかもいかなる派にも参加しようとは思わず、ただ単に書いて、書いて、書こうと思っていた。だから、『芸文』に誘われても書かず、『文芸 [学] 集刊』に誘われても書く、『中国文学』に誘われてもまた書く。三派のいわゆる「機関誌」のどれにも私は作品を発表した。（中略）これもあの三年間（42年から45年まで）に百万字を書いた理由である⁽⁶⁸⁾。

袁犀はまた1942年10月華北作家協会から派遣され、「治安強化運動」の視察をした。「華北作家協会」の機関誌『華北作家月報』に発表されたその時の演説文に、袁犀は「郝慶松」という名前を用い、作家である自分と政治活動に参加する自分とをはっきり区別している。

1943年8月25—27日第二回大東亜文学者大会が開催された際、袁犀はまた華北作家協会より派遣され、「満日文学視察団」の一員として東京での大会を傍聴した⁽⁶⁹⁾。『貝殻』は横光利一の推薦により「大東亜文学賞」を受賞した。受賞後の袁犀の苦悩ぶりは次の文章から伺える。

『貝殻』が受賞して北京に戻った後、ある晩一人で公園を散歩していた。私は突然自分を見つけた：私は深い苦痛の中に陥り、恥じたり後悔したりしている。さまざまなことを一時にすべて思い出した。とくに自分もかつて敵と戦い、命さえ惜しまなかったことを思出し、水辺に座って深夜に涙を流した⁽⁷⁰⁾。

東京で袁犀は横光利一、久米正雄、阿部知二に会い、阿部知二から『旅人』をもらった。袁犀は後に日本に行ってもよかったこととして、阿部知二に会ったことと改造社出版の『魯迅全集』を買ったことの二つをあげた。そしてこの年

の11月袁犀は北京で再び阿部知二を迎えた⁽⁷¹⁾。「阿部知二在北京」という随筆に袁犀は次のように書いている。

小説の取材について、彼は貴重な意見を述べた：「文学者は絶対に嘘をつかない。嘘をつかない信念で書いたものはいいものである。(中略)人間は善の意志を持っている。今日の文学者が書くべきなのはこの「善」であり、「善」の存在は当然嘘ではない。(中略)日本の文学と知性とにおいて最高峰のこの作家に対し、私は彼のことを理解したと言っても良いと思う。

(中略)

私は彼の文章がすきで、彼の人柄が好きで、彼の顔にあるどうしようもないしかも少し皮肉っぽい表情も好きである⁽⁷²⁾。

「日本の文学と知性とにおいて最高峰のこの作家」という言い方はさて置き、当時袁犀が阿部知二から受けた感銘の深さが伺えよう。苦悩する袁犀にとって、それはいささかの慰めにもなったのだろう。

1944年袁犀の短編小説集『森林的寂寞』⁽⁷³⁾が出版された。袁犀の気分はまさに寂しい森のようだった。この年袁犀は青島に行き、「華北決戦文学者大会」を避けた。後に第三回大東亜文学者大会を避けようとし、その招待状を返した。憲兵隊にその理由を求められた時、袁犀は「体調がよくない」と答え、佐藤源三もそれを証明してくれたという⁽⁷⁴⁾。

1945年11月、袁犀は「淪陥区」を離れ、解放区(共産党支配区)に赴いた⁽⁷⁵⁾。

2、徐祖正の悲劇

淪陥期の北京には文人を「売春婦」と「乞食」に自ら喩える作家がいた。

「淪陥区」文人の生活苦は際立っていた。「淪陥」後期の1944年、関永吉は次のように書いている。「千字十五元は今では最低の報酬だ。なぜなら、三斤の米しか買えないからだ。三年前千字は三元だったけど、六斤の米を買えた」⁽⁷⁶⁾。そして原稿料未払いへの怒りをこめて関永吉はさらにいう。「売春婦が客を泊め

る時も、まず“花代”を払わせるのであり、付けにして半年後に“受け取り”に行くようなことはしない。信じないのなら前門外に行って聞いてみるがよい」⁽⁷⁷⁾。

生活苦以上に、「淪陷区」における自由文人は存在自体が難しかったのだった。「現在中国の文学者は自由主義者でもなく、自由職業者でもない。実際は物乞いである」と山丁がきっぱり言った。その理由は次の通りである。「文学団体の経営は政治家たちの仕事であり、文学刊行物の発行は出版業者たちの仕事であり、文学者とは無関係なのである。文学者の左手は政治家としっかりと握手していて、右手は出版業者に乞い願わなければならない。両者の間で、その乞食のようなさまは永遠に無くなるまい。」⁽⁷⁸⁾

苦しい生活に耐えながら、「淪陷区」の文人たちは精神的な苦悶とも闘わなければならなかった。

「日本滞在の短い日々は私に鋭い刺激とホームシックを感じさせた。私は今日の中国により重いノイローゼ患者にさせられたのである」と述べたのは日本文学翻訳者の王真夫である⁽⁷⁹⁾。どうやら「淪陷区」の文人は、「知口派」であればあるほどノイローゼにかかりやすかったようだ。

ここでは徐祖正の悲劇を取り上げたい。

李健吾は「穹枝梅花和瘋子」という随筆の中で、徐祖正の発狂を書いた友人からの手紙を引用した上、その話を敷衍している。

「蘭生弟は突然狂気を生じ、甚だ凶暴になり、室内の物品や衣服をぶち壊し、神経病院に連れて行かれた。この人は一年来宗教に没頭し、それを篤く信仰していた。今回の狂気はもしかすると一昨年受けた衝撃が潜伏し発作を起こしたためかもしれない。」

この狂人とは有名な『蘭生弟 [的日記]』の作者の徐祖正先生である。私は二回会ったことがあり、すべて友人が招待した宴会においてである。背が低く、顔が端正で、容貌がおっとりしており、謙虚で穏やかなクリスチャンの印象を人々に与えた。北京と天津が占領されると、彼は南に行くつ

もりだったが、聞くところによれば、彼は聖書で占おうと随意に開いてみたら、ちょうど「我が城は壊滅せざるべし」だったので、彼は出発を止めたという。友人の手紙に書かれている「一昨年受けた衝撃」とは、彼が一時的に物分かりが悪くなり、日本と偽政府に騙されて、北平師範大学の学長になり、一ヶ月たらずで辞任したことを指している。それから彼は書齋に身を隠し、われわれは「よりいっそう宗教を信仰している」とたまに聞くだけだった。

これは一人の小人物であり、われわれと同じ普通の人間である。一度危険を冒し、良心の呵責に耐えられず、ついに誰も気づかぬうちに正常な感覚を失った。心の中が煮え返り、この可哀相な書生は血の気のない手を挙げ、「室内の物品や衣服をぶち壊し」た。多分彼はすべて彼に関連があるものを嫌がっているのだろう。しかし、最も嫌いでも「ぶち壊せない」のは彼自身の不幸かつ微弱な存在である。彼には自殺する力がなく、彼のすべての力を精神的苦闘に使い：力を消耗しつくすと、彼は発狂してしまったのだ⁽⁸⁰⁾。

徐祖正（1897—1979）は字耀辰、江蘇出身。日本に留学して東京高等師範学校を卒業、更に京都帝国大学に学んだ。帰国後、国立清華大学外国語文系講師、国立北京大学東方文学系教授を務めた。作品には長編自伝小説『蘭生弟的日記』⁽⁸¹⁾、翻訳には島崎藤村の『新生』⁽⁸²⁾などがある。詩、随筆、評論などを『創造季刊』、『語絲』、『駱駝』および『駱駝草』に載せている。『駱駝』雑誌（一冊だけ）と『駱駝草』週刊は周作人、徐祖正らによってつくられたのである⁽⁸³⁾。方紀生は「駱駝草合訂本」のために書いた序文の中で、徐祖正について次のように紹介している。

徐先生は創造社最初のメンバーの一人で、日本の京都大学で勉強している時にすでに同社に入り、郭沫若が書いた創造社史でも彼のことに触れている。京都大学にいた時河上肇と厨川白村両教授を敬慕し、彼らの影響を

受けた。日本近代文学に関しては、周先生以外彼に勝る人はおるまい。後にイギリスに留学し、イギリス・ロマン派詩の研究には造詣がとくに深い。彼は前後三、四十年にわたり北京大学日本語科の教授を務め、周先生のよい助手であった。彼は日本の三代〔大?〕文豪の〔一人である?〕島崎藤村に敬服し、藤村の生涯と似たような境遇にあったので、その長編名著『新生』を翻訳したことがある。彼は自伝小説『蘭生弟的日記』を書いて、二十年代に出版し、周先生と郁達夫に称赞された。しかし〔徐〕先生は再版を拒絶した。これは先生の人生のために芸術を重んじる風格の表れである。当時多くの読者はこれ〔『蘭生弟的日記』〕をゲーテの『若きヴェルテルの悩み』の中国版だと誉めた。このように才能ある学者兼作家に対し、中国近代文学史の編纂者（とくに歴史的な遠見をもっている唐弢先生のような人）たちは彼に対し一字さえ触れなかった。本当に理解に苦しむ⁽⁸⁴⁾。

自伝小説『蘭生弟的日記』を読んで、徐祖正の成長の軌跡を辿ってみよう。東京高等師範学校を卒業後、蘭生弟は京都帝国大学に進学することを選んだ。理由は二つある。一つは「数千年の伝統思想の惰性から脱却しよう」とし、「現実の祖国に帰るのを恐れている」ことである。もう一つは家族との確執であり、蘭生弟の話を借りれば、「私は彼ら一族の人たちのために存在しているかのようで、私はまだ勉強を続けたいと言うのを聞くと、みんな中国ではそんな高級な学問はいらないとか、家族が私を必要とするとかを言って反対するのである。家から手紙を受け取る度に、一日中または何日間何となく心の鈍痛を覚えたのだった」⁽⁸⁵⁾とのことである。つまり、留学生としての蘭生弟は郁達夫「沈淪」の主人公のように祖国への複雑な気持ちに悩んでいると同時に、自分を近代的な個人として扱うのではなく、家の一員としてコントロールしようとする家族に激しい反発を覚えていたのである。さらに日本人の少女杉崎智恵子との恋愛の失敗も加わり、蘭生弟は東京での十年近くの生活に区切りを付けようとした。しかし、東京時代すでに現れはじめたノイローゼは、古都京都の静けさによっ

てさらに進んだあげく、蘭生弟は人に会いたくない、話したくないという恥づかしがりやで陰気な人になってしまった。帰国後の蘭生弟が大学の教師になり、教えることにだんだんと興味を感じてくるところで小説は終了する。

これを個人と家、留学先の日本と祖国中国との間でさまよっている繊細な青年の成長物語として読むのなら、「淪陥区」で起こった徐祖正の悲劇はまさに格好の若き蘭生弟の後日談となったのである。

新進作家の袁犀らの苦悩に比べ、「老作家」の列に属していた徐祖正の苦しみはいっそう深刻なものだったのだろう。異民族の支配下で「協力」の姿勢をとった「満州」にいた古丁らの自己嫌悪の程度をさらに超えて、徐祖正は自らを発狂の境地にまで追いつめたのだった。

3、台湾文人のアイデンティティ探求

淪陥時期の北京文壇では台湾から来た文人たちも活躍していた。最も目立っていたのは洪炎秋（1902—1980）、張我軍（1902—1955）、張深切（1904—1965）の三人である⁽⁸⁶⁾。ここで、三人の教育背景、北京での営みなどを検討し、台湾から来た文人の淪陥区北京での生態、延いては彼らのアイデンティティを追究してみたいと思う。

三人の中で、最初に北京に着いたのは洪炎秋である。洪炎秋、本名は洪樞、筆名は芸蘇、1902年彰化鹿港出身。幼い時の教育は「誦経読史」から始まったという。「我父与我」で、洪炎秋は次のように述べている。

彼 [父] は清代の秀才であった。甲午之役 [日清戦争] で [台湾] は捨てられた地となった。世の中が日に日に変わって行くのを見て [父] は、功名を諦め、以後大陸にも渡らず、詩文を楽しみとし、隠居の頑民 [旧習を従い、新政を喜ばない民] 暮らしをしていた。当時一部の自重しない日和見主義者たちは、外国語を少しでも習ったら、権門を目指そうとし、虎の威を借りる狐のように本来の面目を忘れてしまい、あたかも古人の所

謂「漢人が胡人の言葉を学んで、お城に君臨して漢人を罵る」の如くだった。我が父はそれを骨の髄まで憎み、我々を学校に入れず、自ら家で我々の「誦経読史」を監督教育したのである⁽⁸⁷⁾。

淪陷区北京で発表されたこの随筆からは、古人の詩を引用して当時の「日和見主義者たち」を皮肉る含みも読み取れるし、洪炎秋の早期教育が本格的な儒家伝統教育であることもわかる。後に洪炎秋が入試を経て北京大学に正式入学した最初二人の台湾人学生の一人になれたのも、このような早期古典教育のお蔭であろう。洪炎秋の雑文や随筆は字句をうまく駆使し、伝統的な文字のニオイを匂わせている。「淪陷区」北京はこの戦後台湾における雑文大家の最初の舞台となったのである。

問もなく少年洪炎秋は父親に押しつけられた「誦経読史」式の教育だけでは満足できなくなった。「当時、私は新しい学問に無限の憧れを抱いた。新しい学問を習うには日本語がわからなければならないが、亡父は徹底的な反日的知識人で、日本人をひどく怨んでいるだけではなく、日本人のすることなすことすべてを厭がり、日本語ももちろん例外ではなかった」⁽⁸⁸⁾。日本語を勉強しようとする洪炎秋は、父と衝突せざるを得なかったのである。

折よく当時鹿港公学校の平田丹藏校長が普通の学校に入れない人のため夜間学校を開いたので、洪炎秋は厳父に内緒で入学して日本語を学び始めた。日本への留学も父親の許可をもらえず、密かに父の銀行貯金から六百元を引き出し、黙って出発したのである。日本体育会荏原中学校で資金が尽きるまで約二年間勉強したが、父からは当然延長の学費をもらえず、1920年3月、卒業を待たずに台湾に帰った。

大陸は「五四」以後新文化運動の真最中だった。「五四」初期の北京または北京大学に憧れ、洪炎秋は北京留学を決意した。「中国の政治革命は辛亥の年の武漢蜂起により成果を取めたが、文化革命は民国八年の五四運動から始まったのである。五四運動において、影響が一番大きかったのは恐らく『新青年』雑誌

の執筆者たちにはかならない。私は遙か遠くから北京に勉強に行ったのは、実をいうと『新青年』を執筆している北京大学の教授たちに引かれたからだった」と洪炎秋は回想している⁽⁸⁹⁾。おりよく1919年9月北京大学は「華僑学生入学通融辦法」（「華僑学生入学融通方法」）を公表し、「中学校を卒業したばかり或いは卒業後それほど時を経過せず進学の道を求めてさまよっている志ある台湾人学生に、輝く大道を示した」のである⁽⁹⁰⁾。父との大陸旅行の後、洪炎秋にはついに北京留学の願望が叶った⁽⁹¹⁾。

1923年1月洪炎秋は台湾から北京に到着し、半年の補習を経て、6月に北京大学の予科に合格した。これは台湾人学生が試験を経て北京大学に正式入学した皮切りだった。1929年6月、洪炎秋は北京大学教育学部を卒業、卒論のテーマは「日本帝国主義下の台湾教育」である。「北大人」である洪炎秋は晩年も「北京大学のいいところは、その万象を網羅する気概と独立で自由な精神にあり；そのいいところは、形而上的であり形而下的ではない」⁽⁹²⁾と、北京大学を称え続けていた。

以上の情況から見ると、洪炎秋には日本と中国大陸という二通りの進学の道があったが、結局父親との折り合いもあり、中国大陸にしたのだった。

洪炎秋は北京淪陥時期の周作人や銭稻孫のことおよび自分と両者との関係について、人情味豊かな記録を残している。

北平淪陥期間中、偽組織教育界の漢奸のうち、私は偽北京大学学長の銭稻孫と偽教育督弁の周作人の二人とは互いに親しい間柄であった。銭稻孫は日本人が必ず勝利すると信じていた。しかも淪陥前はあまり良い境遇ではなかったので、一旦日本人に重視され、大学の学長にまでしてもらったので、当然感激の涙にむせび、甘んじて日本の手先になったのである。周作人は終始日本が必ず失敗すると考えており、しかも戦前はすでに名声が天下に広く知られ、文教界の風雲児であったので、日本文化は好きだとは言え、日本軍閥が大嫌いで、偽北京大学文学院院长になったのはそもそも強

制されてうわべだけ追従したにすぎない。はからずも一旦泥沼に陥ると、足を洗いにくくなってしまった。偽文学院では、彼の甥の豊二が庶務を担当し、幼なじみの友人が会計を担当して、二人はぐるになって悪事を働き、公金に大きな穴をあけ、教育総署はそれを清算できず、周作人も彼らに代わって払うことができず、そのまま放っておけば刑事訴訟に至るため、周作人は知っていながら罪を犯すほかになく、生き地獄に飛び込み、教育総署の督弁になって彼らの尻拭いをしたのである。この例を見るとわかるように、同じ漢奸でも、動機は人それぞれだった。北平のこの二人のトップレベルの漢奸とは、私は学生の時からすでに親しく往来していた。私は周作人の小品文に本当に感心させられた。錢稻孫の家の中に設けられた寿泉文庫は日本文化に関する書籍があまねく搜し集められていて、非常に豊富であり、いかなる図書館も比べものにはならないほどだった。そういう訳で、私は彼らのところに行ったりするのが楽しみだった。淪陥の八年間、彼らは偽要人になったが、私に学校の先生をやらせた以外は、偽役人になるよう誘ったことは一回もなく、さらに日本人のためのいかなることもさせなかった。つまり、私という国情にもよく通じ、日本語もでき、漢奸になる資格を完全に持っている素材を泥で汚すことなく、些かの面倒もかけなかったのだった。これについて、彼らに深く感謝の意を表さなければならぬ⁽⁹³⁾。

洪炎秋は「漢奸」に置かれた彼らの境地を分析し、一個の人間としての彼らを理解し、さらに知友として感謝の意を表したのである。

洪炎秋は北京大学を卒業後、河北省教育庁課員を経て北平国立農学院で日本語を教え、私立の中国、民国、華北、郁文などの大学で教育学と国文学を教えた。北京が陥落した後は、北京大学農学院の財産保管委員となり、生活のため北京大学と師範大学で教える一方、北京で「人々書店」を経営し、語学の専門書を出版していた。

文人としての洪炎秋は主に「芸蘇」という筆名でエッセイを書いていた。洪炎秋という本名で翻訳や論説を行ったこともある⁽⁹⁴⁾。

張我軍、本名は張清榮、原籍地は福建南靖、1902年台湾台北県板橋市に生まれた。1916年3月板橋公学校を卒業後、張我軍は台北のある日本人が経営する靴屋で二年間徒弟修業をした。その後、台北新高銀行の給仕を経て社員になった。夜間は成淵学校で中学校の科目を補習し、週末や休日は万華のある老秀才について漢文を勉強していた。1923年新高銀行は不景気でリストラを行い、張我軍が当時勤めていた新高銀行厦門支店は倒産した。倒産手当をもらって、張我軍は北京に行って進学することを決めた。

張我軍は憧れの北京大学を目指したが、1924年9月の試験に通らず入学できなかった⁽⁹⁵⁾。1926年6月再び北京に行き、私立中国大学国学科に入り、一年後国立北京師範大学国文科に転入し、1929年6月同科を卒業した。張我軍は「台湾人で大陸の大学の国文科を卒業した最初の人である」⁽⁹⁶⁾。

張我軍は早くから台湾で名を成し、台湾新文学の旗手となった。1924年3月25日、張我軍は生まれて初めての新詩(白話詩)を書いた⁽⁹⁷⁾。1925年12月には、詩集の『乱都之恋』を台湾で自費出版している。張我軍は文芸評論も続々と書いた⁽⁹⁸⁾。

1926年北京に定住してから、張我軍は日本の文学作品や学術著作を大量に翻訳し始めた⁽⁹⁹⁾。大学卒業後張我軍は北京大学、中国大学、北京師範大学で日本語を教え、「国内の大学で日本語を教える初めての台湾人」となった⁽¹⁰⁰⁾。張我軍が書いた『日本語基礎読本』⁽¹⁰¹⁾は九回再版され、十数校の大学で教科書として採用された。張我軍が編集長を務めた雑誌『日文与日語』⁽¹⁰²⁾は、「民国以来中国人によって創刊されたはじめてのそして恐らく唯一の日本語を研究する月刊誌である」⁽¹⁰³⁾。

張深切は1904年8月台湾南投に生まれた。筆名には楚女、者也、死光、南翔、紅草、之乎などがある。7歳の時、地元の「李春盛公館」にある私塾に入り、

『三字経』及び中国の小学生用教科書を習い始めた。啓蒙の先生は漢民族意識が強い鹿港出身の秀才洪月樵だった。公学校に入ったのは10歳になってからのことである。伝統的な暗誦を主とする読書方法から解放され、読書に興味を感じ始めたのはこの時期だった。

1917年、14歳の張深切は日本に来て、伝通院礪川小学校に編入され、五年生となった。16歳の時、剣道の練習中、日本人の先生と衝突し、「清国奴」と言われたことをきっかけに「民族意識」に目覚め始めた。この年、張深切は豊山中学校に入った。1920年、国を救うため科学を勉強しなければならないと考え、張深切は好みではない東京府立化学工業学校に転校し、時を同じく寄宿先を日本人の先生の家から小石川区茗荷谷にある高砂寮⁽¹⁰⁴⁾に変わった。1922年張深切は青山学院中等部に編入された。1923年青山学院は関東大震災で甚大な損害を受け、一方中国大陸では新文化運動の真最中でもあったので、張深切も洪炎秋や張我軍と同じく中国大陸に憧れ、ついに1923年に大陸に渡った。1924年から短期間上海商務印書館付属の国語師範学校で勉強したこともある。1927年張深切は広州にある中山大学法科政治学部⁽¹⁰⁵⁾に合格した。

「盧溝橋事変」後、張深切は「時局柄台湾で成功することが難しいと感じ」⁽¹⁰⁶⁾、「国のため義務を尽くすべき」⁽¹⁰⁷⁾と思い、1938年3月北京に到着した。本来抗戦地区に脱出するつもりだったが、家族を犠牲にしたくないのでそれは思いとどまった⁽¹⁰⁸⁾。北京駅を出た時、張深切はかなり感傷的だった。

駅を出ると、目の前に高くそびえ立っている朝陽門が見えた。これは初めて東京駅を出て宮城を見た時の感想とはまったく違うのだ。当時は自分を卑下したものだが、今回は自らの誇りを感じるのだ。以前からよく「大前門」ブランドの煙草の箱でこの城楼を見ていたものの、その雄大さを感じなかったが、今度やっと現場に来てその実際の姿を見上げ、思わずうれしさを覚え長嘆した。(中略)私たちはこんなに偉大な文化を持ち、四方の夷族を征服でき、異民族を同化できたのに、今は城郭は変わらないが、人

間は変ってしまった。侵略者日本の支配下、古都の人物はみな取るに足らぬ人間になってしまったのだ⁽¹⁰⁹⁾。

「取るに足らぬ」人間の間で、張深切は北京芸術専科學校の教授および訓育主任をし、国立新民學院の日文教授をし、「中国文化振興会」⁽¹¹⁰⁾の委員にもなったが、淪陥時期北京文壇に対する一番大きな貢献はやはり『中国文芸』を編集したことであろう。

『中国文芸』創刊号の「編後記」において張深切は次のように述べている。

国破れ、党滅び、悪が除かれるのは仕方がないが、文化は滅ぼされてはならない。我々は国が一日なくともかまわぬが、文化は一日としてなしではいられない。文化は國家の命脈だからだ⁽¹¹¹⁾。

「淪陥区」で「文化」ばかりを強調するのは張深切の苦心のすえの選択であろう⁽¹¹²⁾。

洪炎秋、張我軍および張深切、この三人それぞれの大陸留学、大陸体験に共通しているものは、大陸への憧れ、中国へのアイデンティティの再確認だと言えよう。

- 1 蔣瀕「旧的過去和新的未来——一九四一歳首看[華]北文壇」、『中国文芸』1941年1月第3卷第5期，p3。
- 2 上官蓉（李景慈）「北方文壇の今昔」、『文化年刊』1944年第2卷，p138。
- 3 当時章回小説はまだかなりの読者を有している。「ここには数多くの章回小説があり、彼ら[読者]は何も新文学を読むことはあるまい。」（史蓀「日前華北文芸界批判」、『国民雜誌』1941年9月，p60）という不満を含んだ論調からもそれが伺える。
- 4 蔣瀕「旧的過去和新的未来——一九四一歳首看[華]北文壇」、『中国文芸』1941年1月第3卷第5期，p3。
- 5 吳樓（閔永吉）「古城の收穫——對幾個新進作家作品之綜合的評介」、『国民雜誌』1942年1月第13期，p113。
- 6 張金壽「希望文芸界的——幾句話」、『中国文芸』1940年6月第2卷第4期，p64。
- 7 李景慈（1918—），筆名には林榕、林慧文、阿茨、楚天闊、上官蓉などがある。

輔仁大学中国文学科在学中、純文学雑誌『文苑』（後に『輔仁文苑』と改名）を編集した。1941年卒業後、北京大学文學院中文科で新文学研究および資料の整理をした。1943年には『中国文芸』の編集に携わった。エッセー集の『遠人集』は新民印書館より新進作家集の第五集として1943年12月に発行され、梅娘の小説集『魚』と共に第一回大東亜文学賞副賞の「選外佳作」、つまり「奨励賞」を受賞した。『遠人集』について李景慈は「後記」（p187）で「私には遠方にいる無数の友人を懐かしく思う気持ちがあり、故に常々感ずる所があるのだ。寂莫とした歳月の中、当時の感触を記録してきた」と書いている。

- 8 楚天闊(李景慈)「一九三九年北方文芸界論略」,『中国公論』1940年第2巻第4期。
- 9 楚天闊(李景慈)「一九四〇年の北方文芸界」,『中国公論』1941年第4巻第4期。
- 10 楚天闊(李景慈)「一年來の北方文芸界」,『中国公論』1942年第8巻第4期。
- 11 楚天闊(李景慈)「三十二年の北方文芸界」,『中国公論』1943年第10巻第4期。
- 12 上官蓉(李景慈)「北方文壇の今昔」,『文化年刊』1944年第2巻。
- 13 この諸篇は、1939年から1944年まで、一年ごと文芸界の動きや状況を分析し、評論を加えた労作である。「満州」,香港,上海,北京など各地域の文芸の比較,北方における各文芸雑誌の分析,文学翻訳の検討,新進作家たちの作品の評論などが、その中心的テーマだった。
- 14 張深切および『中国文芸』についてはまた本論の「五、梅娘周辺の文人たち」の3を参照。
- 15 王静怡「中国文壇の慧星」,『中国文芸』1939年10月第1巻第2期, p53。
- 16 少珍「読者通訊」,『中国文芸』1939年10月第1巻第2期, p72。
- 17 迷生(張深切)「關於中国文芸の出現及其他」,『中国文芸』1939年9月第1巻第1期創刊号, p17。
- 18 方濟「出版文化質的改善」,『華文毎日』1943年12月第11巻第12期, p8。
- 19 楚天闊(李景慈)「一年來の北方文芸界」,『中国公論』1942年第8巻第4期, p79。
- 20 木山英雄『北京苦住庵記——日中戦争時代の周作人』,築摩書房1978年3月初版第1刷, p215。
- 21 上官箏(関永吉)「一年來華北文壇の総清算」,『中国文芸』1943年1月第7巻第5期, p18。
- 22 黎建青「一年間の華北文壇(上)」,『華文毎日』1944年2月号, p14。
- 23 吉川幸次郎は『芸文雑誌』第一号を読んで次のように書いている。

この雑誌は、狭義の文学雑誌ではない。周作人氏の「中国文学上の兩種思

想」以下、諸名家の文学史的な論文は、もとより本国の人たちが本国の文学に対してめぐらした考察であって、われわれ外国人の企及すべからざるものを、それぞれにもつてゐる。また銭稻孫氏がわれわれの古典を、紹介されようとする努力も、いつもながら、感謝のほかはない。（『日華の文学者に』、『文学界』1943年10月、p13.）

- 24 黎建青「一年間の華北文壇（下）」、『華文毎日』1944年3月号、p25。
- 25 一方、同じ1943年、文壇に不満を抱き、文人を諷刺する諧謔詩が書かれている。例えば、馬不烈「文場新臉譜」、『華文毎日』1943年4月第10巻第8期、p20。
- 26 黎建青「一年間の華北文壇（上）」、『華文毎日』1944年2月号、p13。
- 27 楚天闊（李景慈）「三十二年的北方文芸界」、『中国公論』1943年第10巻第4期、p51。
- 28 「満州」を離れた作家の一部は、「満州」—北京、または「満州」—日本—北京というルートを通った。黎建青「一年間の華北文壇（上）」（『華文毎日』1944年2月号、p13）は以下のように書いている。
- 去年（民国三十一年）一年間、華北文壇には在来の作家たちのほかに、満州から数多くの作者が来て、表面的に彼らの集団を形成し、元の華北文壇とはほぼ無関係だが、ともに勤勉に努力している。
- 29 釜屋修「梅娘——その半生・覚え書き」には次のような記録がある。
- 四二年初、北京大学の近く、東四六条に居を定め、梅娘は北京大学文學院（院長は周作人）中文系に入学（卒業せず）。作人の授業はおもしろく、数少ない受講科目だったが、「漢奸」周作人には批判的だったという。作人はゼミの学生一人ひとりに童話を書かせ、四三年新民印書館より刊行。梅娘の提出したのは「青姑娘の夢」「聰明的南陔」の二篇である。（『季刊中国』No36、1994年3月春季号、p71.）
- 30 梅娘「我与日本」、『民主中国』1995年3月号、p57。
- 31 『燕京文学』1944年2月第17号には次のような広告を載せている：「少年読物の少ない中国児童に絶対的に受け入れられる文庫。わかりやすく、しかも新進文学者の筆になる流麗な文筆は、邦人の中国語研究の入門書として選ばれてもいいものである。」
- 32 梅娘「我与日本」、『民主中国』1995年3月号、p57。
- 33 「華北文芸座談会」、『華文毎日』第10巻第6期1943年3月、p13。
- 34 傅雷「論張愛玲的小説」、『万象』1944年5月。
- 35 飯塚朗「石叫ぶべし」、『燕京文学』1942年7月第11号、p13。

- 36 楚天闊「一九三九年北方文芸界論略」,『中国公論』1940年第2巻第4期, p140。
- 37 「編者の話」,『中国文芸』1940年12月第3巻第4期, p56。
- 38 孤独練離「我很想忘記過去」,『婦女雜誌』1944年第5巻第8期, p12。
- 39 呉棲(関永吉)「古城の収穫——対幾個新進作家作品之総合的評介」,『国民雜誌』1942年1月第13期, p116。
- 40 上官蓉(李景慈)「北方文壇の今昔」,『文化年刊』1944年第2巻, p149。
- 41 「新進作家集」,新民印書館刊行。全十冊:『貝殼』(袁犀),『魚』(梅娘),『太平願』(馬驪),『萍絮集』(蕭艾),『遠人集』(林榕),『秋初』(関永吉),『豊年』(山丁),『兼差』(高深),『土』(沙里),『白馬の騎者』(雷妍)。
- 42 「文化報道」,『中国文学』1944年1月創刊号, p70。
- 43 「文化報道」,『中国文学』1944年4月号, p71。
- 44 梅娘の中短編小説集『魚』(「宋儒」,「魚」,「旅」,「黄昏之歌」,「雨夜」,「一個咽」を収めている)は1943年6月25日北京新民印書館より出版された。
- 45 袁犀の長編小説『貝殼』は1943年5月15日北京新民印書館より出版された。
- 46 1943年11月20日『華文毎日』主催の座談会(場所:北京留日同学会。出席者:袁犀,梅娘,雷妍,山丁,馬驪,上官箏,魯風,王真夫,呂奇,和田進,上野,呂風)における雷妍の発言,「華北文芸一夕談」,『華文毎日』1944年2月第12巻第2期, p35。
- 47 同上の座談会における王真夫の発言,「華北文芸一夕談」,『華文毎日』1944年2月第12巻第2期, p37。
- 48 大東亜文学者大会,「大東亜戦争」勃発の翌年結成された日本文学報国会より主催され,第一回目は1942年11月3日から10日まで東京と大阪で,第二回目は1943年8月25日より三日間東京で,第三回目は1944年11月12日より三日間南京で開かれた。
- 49 梅娘の中短篇小説集『蟹』(「行路難」,「動手術之前」,「小広告里面的故事」,「陽春小曲」,「春到人間」,「蟹」を収めている)は1944年11月1日華北作家協会の「華北文芸叢書」の一種として武徳報社より出版された。
- 50 米国人学者Gunn, Edward M.は梅娘の『蟹』の授賞を次のように見ている。

この小説ははっきりとした日本の政策のための宣伝価値を示していないが、文学としてもあまりお勧めできない。まばらにいい表現、生き生きとした対話、それに時々風刺があるが、物語は散漫且つスケッチ風であり、ヒロインの性格は小説の統一性を支えあるいは一定の深さを与えるにはあまりに実体を欠いているのである。この作品が文学賞に選ばれたのはたぶん梅娘が柳

龍光の妻で、しかも久米正雄の小説を翻訳したことがあるからであろう。(Gunn, Edward M. “Unwelcome Muse : Chinese Literature in Shanghai and Peking 1937—1945” Columbia University Press, 1980, p42.)

中茵英助は「北京の貝殻」というフィクションの中で『貝殻』が授賞されるに至る選考過程および当時の評価について次のように書いている。

座談は予選のようなものだ。左藤の助手であり、袁犀の僚友である日本語の堪能な蔣義方のような人物があらまし翻訳して聞かせ、東京で有力な詮衡委員の横光が正式に指名したというように考えたかった。また、もう一人の推薦者には、第二回大東亜文学者大会へ出席し授賞式に臨んだ彼を、他の誰にもまして厚遇してくれたという阿部知二がいたのかもしれないなどと。

『貝殻』はあのころ、わたしたち同人雑誌仲間の間では、あまり評判がよくなかった。

満州事変がともかく終熄し、盧溝橋事変による日中戦争が本格的に拡大する直前の昭和十年ごろ、どこか嵐の前の静けさといった趣のある北京、青島を舞台にして、中国の若い知識層男女の頹廢的な生活を綴った風俗小説という評価である。(中茵英助「北京の貝殻」、『文学界』1992年第10期, p56)

51 飯塚朗「石叫ぶべし」、『燕京文学』1942年7月第11号, p13。

52 飯塚朗「石叫ぶべし」、『燕京文学』1942年7月第11号, p13。

なお、仲町貞子(1894—1966)については『日本近代文学大事典』に「昭和初年代の特異な一女流として一部の注目を浴びた。志賀直哉を尊敬し、豊潤な感性によって底辺の人々を愛情をもって描き出すところに作風の特色がある」(日本近代文学館編『日本近代文学大事典』, 講談社1984年10月第1刷, p1078)と記載されている。『梅の花』は昭和11年6月砂子屋書房刊。

53 芸術面の不足を指摘するつもりだったのだろうが、感情的になった例もある。吉川幸次郎は『芸文雑誌』第一号を読んで、「この雑誌に収められた小説に至つては、何とも腑に落ちかねたのである」、「すなわち、この雑誌に収められた小説は、四篇であるが、四篇ともに、私には不可解な作品である」と感想を語り、さらに梅娘の「動手術之前」(「手術の前」)については次のように書いている。

これは淪陥した女性の告白である。夫の出張の留守をする人妻が、夫の友人から、最も下等な方法で誘惑されて、貞操を失ひ、健康にも異状を来す。その手術を受ける前に、医者に対してする告白である。これは、どう考へて見ても、不潔きはまる文学である。かういつては、作者に対し甚だ非礼であるけれども、私のかつて読んだ文学のうち、最も不潔なものの一つであると

いふを憚らぬ。もつとも作者の意図は、さうした不潔な境界の中にあつても、人間精神の尊厳が、なほ全く失わはれるに至らぬことを、指摘するにあるとも考へられる。しかしさうした指摘の意志は、きはめて微弱である。(中略)私には不可解といふほかはない。(『日華の文学者に』、『文学界』1943年10月、p13-14。築摩書房昭和45年7月版『吉川幸次郎全集』第16巻、p293。)

「動手術之前」の芸術面の不足をほとんど指摘しないまま、「不潔」という言葉を三回も用いて不満をもらしたことから、吉川本人の男性中心社会の「潔癖性」を見い出せよう。

- 54 陳綿、北京大学卒、フランスパリ大学芸術学院に留学、演劇学博士号を獲得。当時北京女子師範学院フランス語講師、中法大学教授。劇作家、演劇監督。脚本『候光』は1943年中国公論社より出版。
- 55 志智嘉(志智嘉九郎)「芸文雑談」、『芸文雑誌』1944年第2巻第1期、p23。
- 56 李烽「朝露」、1941年10月第26期。
- 57 呉楼(1916-、本名は張守謙、張島ともいう。筆名には関永吉、関山、呉楼、呉公汗、上官箏などがある。短篇創作集『秋初』は「新進作家集」の第六冊目である)「古城の収穫——対幾個新進作家作品之総合的評介」、『国民雑誌』1942年1月第13期、p116。

なお、飯塚朗「石叫ぶべし」(『燕京文学』1942年7月第11号、p13)は「朝露」および李烽について次のように語っている。

この号には女の作家が四人も書いているので、猶更に線が弱く感じさせられたのか、中国の女流作家は、嘗てはと云つても事変前までには、もつと奔放な性格があつた筈なのに不思議な気がする。

「朝露」というのも李烽といふ女作家のものである。之は個人的にも数年知っているが、輔仁大学へ行つている女学生だったが、つい先日奉天へ行つて結婚生活に這入つたらしい。色々英文学を勉強するとか、日本へ留学したいとか、ハモニカを習ひに行つているとか、奔放に見えたけれども、急に結婚する気になつて姿を消したから、今後は作品を書くかどうかは分らぬが、この「朝露」は構成其他に努力のあととはみえるが、まだ少女小説の殻が嘴についている様子である。江南から来た親戚の青年と、公園で偶然遇つた女性との恋愛物語で、自由結婚から決裂まで丹念[念]に書いてあるが、人生幾何、譬如朝露といふ曹孟徳の詩で結んである。「茶花女」に随喜の涙を流す小姐は、文学などせず結婚なさるほうがよさそうである。

- 58 袁犀『塩』、1944-1945年『中国文学』に連載。別名『面纱』。

- 59 上官蓉（李景慈）「『貝殼』和『予且短篇小説集』」、『中国文芸』1943年10月第9卷第2期，p24。
- 60 上官箏（関永吉）「袁犀論」、『中国文芸』1943年11月第9卷第3期，p7。
- 61 袁犀「前記」、『貝殼』新民印書館1943年5月。
- 62 Gunn, Edward M. "Unwelcome Muse : Chinese Literature in Shanghai and Peking 1937—1945" Columbia University Press, 1980, p39.
- 63 「関于最近之文芸作品」、『庸報』1943年10月6日から8日まで連載。「文芸雑談」、『芸文雑誌』1944年第2巻第1期，p23。
- 64 飯塚朗「石叫ふべし」、『燕京文学』1942年7月第11号，p13。
- 65 上官蓉（李景慈）「誠摯の關懷——答志智嘉先生」、『中国文学』1944年第3号，p44—45。
- 66 「李克異年譜」，李士非ほか編『李克異研究資料』，花城出版社1991年5月広州第1版第1刷，p11—13。
- 67 梅娘「一個岔曲」（馮為群・王建中・李春燕・李樹權編『東北淪陥時期文学国際学術研討会論文集』，瀋陽出版社1992年6月，第1版第1刷，所収）を参照。
- 68 「李克異年譜」，李士非ほか編『李克異研究資料』，花城出版社1991年5月広州第1版第1刷，p27。なお、『芸文雑誌』、『文学集刊』および『中国文学』の主な編集者はそれぞれ周作人，沈啓無および柳龍光である。
- 69 「華北作家協会派遣満日文学視察団旅行日記」、『中国文学』1944年1月創刊号，p64—65を参照。
- 70 「李克異年譜」，李士非ほか編『李克異研究資料』，花城出版社1991年5月広州第1版第1刷，p30。
- 71 「李克異年譜」，李士非ほか編『李克異研究資料』，花城出版社1991年5月広州第1版第1刷，p28—29。
- 72 袁犀「阿部知二在北京」，「文学十日」『民衆報』第一号1943年1月10日。
 なお、『民衆報』副刊「文学十日」の主宰者は梁山丁である。この副刊は原稿料が出ず，代わりに十日ごとに作家たちのために夕食会を行っていた。（王慶華「関永吉訪問記——関永吉1940—1944年在北平の文学活動」、『新文学史料』1998年第2期，p103を参照）。
- 73 袁犀『森林的寂寞』，華北文化書局1943年。この短編小説集には以下の小説を収めている，「鎮上の人們」，「虫」，「一個做母親的」，「露台」，「一個人的一生」，「廢園」，「森林的寂寞」，「人間」，「街」，「風雪」。
- 74 「李克異年譜」，李士非ほか編『李克異研究資料』，花城出版社1991年5月広州

第1版第1刷, p33。

75 中華人民共和国が建国した後、袁犀は「李克異」と改名した。李克異という筆名についての解釈は以下の通りである。

昔の筆名はよく誤解されるから、名字と名前を「李克異」に直した。厳しく自分を律し、異端を克服するという意味であり、党と革命への「帰心」を示している。建国後に書いた報道文、シナリオおよび長編小説はすべてこの名前で署名し、それは逝去するまで続いた。(『筆名箋注』, 李士非ほか編『李克異研究資料』, 花城出版社1991年5月広州第1版第1刷, p484。)

建国後の袁犀——李克異は社会主義中国に忠誠を尽くした。1949年1月30日彼は中国共産党の党員候補となり、この日を自分が「新生を得た一日」と日記に記している。

76 呉公汗(関永吉)「活命第一」, 『中国文学』1944年2月号, p7。

77 呉公汗(関永吉)「活命第一」, 『中国文学』1944年2月号, p7。

78 山丁「文学雑感」, 『中国文学』1944年2月号, p8。

79 王真夫「旅日随想」, 『中国文学』1944年1月創刊号, p65。

80 李健吾「穹枝梅花和瘋子」, 『切夢刀』文化生活出版社中華民國三十七年十一月初版, p38—39。

81 徐祖正『蘭生弟的日記』, 北新書局1926年7月。

82 徐祖正訳島崎藤村『新生』, 北新書局1927年。

83 「駱駝」について、代田智明が次のように解釈している。「中国の近代文学を渺茫とした砂漠にたとえ、人と荷駄を背負って忍耐強く砂漠を歩みゆく駱駝に、白らの姿を重ねあわせた、というところであろうか。」(「——解題——『駱駝草』をめぐって」, 伊藤虎丸編『駱駝草附駱駝』, アジア出版1982年1月, 所収。)

84 方紀生「駱駝草合訂本序」, 伊藤虎丸編『駱駝草附駱駝』, アジア出版(汲古書院制作)1982年1月, p18—19。

85 徐祖正『蘭生弟的日記』, 北新書局1926年7月, p21。

86 台湾の文学史家秦賢次はこの三人のことを「台湾作家三銃士」と称している。(秦賢次「台湾新文学運動的奠基者——張我軍」, 『中国現代文学研究叢刊』1990年第3期, p236。)三人は年齢が近く、ともに長期の北京滞在経験があった(洪炎秋は二十五年、張我軍は二十年、張深切は九年)。張深切の文章から三人の友人関係をみてみよう。

北京にいた同郷人はみんな素質がよく、ほとんどが大学教育を受けており、やくざや「ゴロツキ」類が少なかった。[北京は]厦門や福州、上海などに比

べ文明度がはるかに高かったので、私をととても喜ばせ安心させ、私にとって役立つ場所だと思った。私は炎秋、我軍とたちまち莫逆の交わりを結んだ。炎秋は秘密裡に偽組織支配下の北京大学、北京師範大学を監視する使命を負っていたから、いかなる大学の専任教授のポストも受け入れず、各大学または専門学校の講師のみ兼任して、毎日苦勞して電車で東奔西走し、至って忙しかつた。我軍は北京大学の教授を専任し、わりと暇があり、私と会う時間もわりと多かつたので、いろいろと助かつた。(張深切『里程碑——又名：黒色の太陽』台湾台中聖工出版社1961年12月。『張深切全集』第2卷、文経出版社有限公司台北1998年1月より引用、p643。)

三人は経歴や思想などの面において共通した部分が多く、性格も合い、深い友情で結ばれていた。助け合いながら、ともに淪陥区北京の時空を共有したこの三人をめぐっては、淪陥区文学に関する以下の三冊の専門著作がある程度触れている：劉心皇『抗戰時期淪陥区文学史』、成文出版社有限公司1980年5月台湾初版；張泉『淪陥時期北京文学八年』、中国和平出版社1994年10月第1版；徐迺翔・黄万華『中国抗戰時期淪陥区文学史』、福建教育出版社1995年7月第1版。この三人のことをテーマにした論文に岡田英樹の「淪陥時期北京文壇の台湾作家三銃士」（下村作次郎・中島利朗・藤井省三・黄英哲編『よみがえる台湾文学——日本統治期の作家と作品』、東方書店1995年10月初版第1刷、所収）がある。岡田論文は『中国文芸』乗取り事件』、『芸文雑誌』創刊をめぐって、張深切玉砕す』、「張我軍文学者統合計画を粉砕す」という三つの「台湾作家の行動をかりて、当時の北京文壇の概況を明らかにしたいという意図から出発した」作業である。

- 87 洪炎秋「我父与我」、『中国文芸』第2卷第1期1940年1月、p6。
- 88 洪炎秋『常人常談』、中央書局中華民國63年10月台中初版、p27。
- 89 洪炎秋「国内名士印象記」、『廢人廢話』、中央書局中華民國59年7月台中第4版、p167。
- 90 秦賢次「張我軍及其同時代的北京台湾留学生」、彭小妍主編『漂泊与郷土——張我軍逝世四十周年記念論文集』、(台湾)行政院文化建設委員會中華民國85年5月初版、p64。
- 91 台湾人大陸留学の背景について、秦賢次は「張我軍及其同時代的北京台湾留学生」(彭小妍主編『漂泊与郷土——張我軍逝世四十周年記念論文集』、行政院文化建設委員會中華民國85年5月初版、所収)の中で以下のように述べている。

「五四」初期の台湾人学生にとって、医学校、師範学校、あるいはほかの農林、工業など職業学校を卒業すると、いずれもいい出世の道があり、卒業

してすぐ就職口を見つけられた。しかし一般公学校出身者、および普通中学校あるいは商業学校の卒業者は大体が進学問題に迷ってしまう。家柄が裕福な人は大半が日本乃至欧米に行って学問を続けるが、経済状況があまり思わしくない人、または植民地教育に深く不満を感じている人、あるいは強い民族意識を持っている人は、大陸へ行って勉強を続けることを考えた。(p63)

「経済状況があまり思わしくない」、「植民地教育に深く不満を感じている」、「強い民族意識を持っている」ことの三点は大陸留学の背景となっているが、洪炎秋の場合もう一つ挙げられるのは「五四」初期の北京または北京大学への憧れである。

- 92 洪炎秋「自伝」、『洪炎秋自選集』，黎明文化事業股文有限公司中華民國64年元月台北初版，p13。
- 93 洪炎秋「自伝」、『洪炎秋自選集』，黎明文化事業股文有限公司中華民國64年元月台北初版，p4—5。
- 94 洪炎秋のエッセイには『中国文芸』に発表された「偷書」（第1巻第1期1939年9月）、「健忘症礼賛」（第1巻第2期1939年10月）、「閑話鮑魚」（第1巻第3期1939年11月）、「關於死」（第1巻第4期1939年12月）、「賦得長生」（第1巻第5期1940年1月）、「就“河豚”而言」（第1巻第6期1940年2月）、「我父与我」（第2巻第1期1940年3月）、「馭夫術」（第2巻第3期1940年5月）、「辮髮茶話」（第2巻第4期1940年6月）、「貌美論」（第2巻第5期1940年7月）などがあり、翻訳には『日本研究』で発表された中村孝也の「日本精神的特質」（第1巻第2期1943年11月）、田村剛の「日本庭園的国民性」（第1巻第3期1943年12月）などがあり、論説文には『日本研究』で発表された「何謂大和魂」（第2巻第1期1944年1月）などがある。
- 95 『北京大学日刊』第11分冊1924年9月19日，北京人民出版社1981年複製。
- 96 秦賢次「張我軍及其同時代的北京台湾留学生」，彭小妍主編『漂泊与鄉土——張我軍逝世四十周年紀念論文集』，（台湾）行政院文化建設委員會中華民國85年5月初版，p59。
- 97 張我軍「沈寂」，『台湾民報』2巻8号1924年5月11日。
- 98 張我軍は1924年10月に台北に帰り，約一年間『台湾民報』を編集していた。張我軍がこの時期に書いた文芸評論は主に『台湾民報』に発表され，その中では，以下の編目が重要視されている。「糟糕的台湾文学界」（2巻24号）、「為台湾文学界一哭」（2巻26号）、「請合力拆下這座敗草叢中的破旧店堂」（3巻1号）。
- 99 張光正初稿，秦賢次增補「張我軍著訳書目和作品篇目」（彭小妍主編『漂泊与鄉

- 士——張我軍逝世四十周年記念論文集』、台湾行政院文化建設委員會中華民國85年5月初版、所収)を参照。
- 100 秦賢次「台湾新文学運動の奠基者——張我軍」、『中国現代文学研究叢刊』1990年第3期、p233。
- 101 張我軍『日語基礎読本』、人々書店1932年。
- 102 『日文与日語』(『日本文と日本語』)(1934年1月—1935年12月)雑誌は人々書店より発行されていた。
- 103 秦賢次「台湾新文学運動の奠基者——張我軍」、『中国現代文学研究叢刊』1990年第3期、p235。なお、張我軍が「大東亜文学者大会」に参加したことについては、拙論「張我軍と“大東亜文学者大会”」(『アジア遊学』No13、2000年2月)を参照。
- 104 高砂寮とは1912年台湾総督府が台湾人留学生のため設立した学生寮である。
- 105 広州で学生運動を起したため、張深切は1928年12月に懲役3年と判決され、翌年4月二審で2年に減刑された。卒業したかどうかは不明。
- 106 「張深切年譜」『張深切全集』(全12巻)、文経出版社有限公司台北1998年1月、p24。
- 107 張深切「亡命」、『里程碑——又名：黒色の太陽』、台湾台中聖工出版社1961年12月。『張深切全集』第2巻(文経出版社有限公司台北1998年1月)より引用、p542。
- 108 張深切「刺虎」、『里程碑——又名：黒色の太陽』(台湾台中聖工出版社1961年12月。『張深切全集』第2巻、文経出版社有限公司台北1998年1月)を参照。
- 109 張深切「陰蠱」、『里程碑——又名：黒色の太陽』、台湾台中聖工出版社1961年12月。『張深切全集』第2巻(文経出版社有限公司台北1998年1月)より引用、p642。
- 110 新民印書館の外郭団体、会長は曹汝霖、委員は周作人、銭稻孫、徐祖正、俞平伯など。
- 111 張深切「編後記」、『中国文芸』創刊号1939年9月、p104。
- 112 張深切については、木山英雄『北京苦住庵記——日中戦争時代の周作人』(築摩書房1978年3月初版)が論及しており、黄英哲「張深切における政治と文学」(中国文芸研究会『野草』1990年第46号)はさらに詳しい。「資料『張深切北京日記』」(解説：木山英雄 序文：黄英哲「資料『張深切北京日記』」、中国文芸研究会『野草』1995年第56号)が公表されたのを受けて、岡田英樹「淪陥時期北京文壇の台湾作家三銃士」(下村作次郎・中島利朗・藤井省三・黄英哲編『よみがえる台湾文学——日本統治期の作家と作品』、東方書店1995年10月初版、所収)も発表されている。台湾で新しく出版された『張深切全集』(全12巻、文経出版社有限公

司台北1998年1月)を加えると、張深切と淪陷時代北京文壇の關係が相当見通せるようになったのである。その概要を以上の文献からまとめてみると以下の通りである。

張深切は日本の美術評論家一氏義良の紹介で北支那方面軍參謀堂ノ脇光雄中佐と知り合い、堂ノ脇光雄に支えられ文芸雑誌『中国文芸』を出版することになった。『中国文芸』を刊行するに際して張深切が出した四つの条件(1, 編集方針と内容に一切干渉しない。2, 雑誌にはいかなる宣伝の標語も載せない。3, 主義思想の宣伝をしない。4, ほかの新聞雑誌団体に加わって政治活動をしない。)はすべて堂ノ脇光雄の同意を得た。雑誌は1939年9月に順調に創刊され、一年立つたころ、張深切は北支派遣軍司令部報道部宣撫担当山家亨に雑誌の接収を通告された。その後、『中国文芸』は亀谷利一が主導する戦争の意義を宣伝報道していた武徳報社に組み込まれ、張深切は『中国文芸』を放棄せざるをえなかった。1943年「芸文社」の成立、『芸文雑誌』の創刊に際し、林房雄および沈啓無と不仲となり、周作人との間にも誤解が生じたので、張深切は身を引いた。彼はそれ以後北京文壇と縁を切り、商売で生計を維持していた。